

異質な存在への眼差し ——『つまらない女』を読む

岩 永 祥 恵

1893年に初演されたオスカー・ワイルドの *A Woman of No Importance* (以下『つまらない女』) は、彼の2本目の社交界劇として観客に歓迎されて受け入れられた。この芝居の特徴の一つとして、いかにも当時のイギリス社交界で交わされていたであろうような会話やそれに伴う行動様式が挙げられるのだが、初演当時、一部の階級の観客はおそらく自分達の姿を投影されたものとしてこの芝居を見ていた、と推測するのも可能であろう。そこに自らの似姿を発見し、自分或いは友人の誰かが発したような台詞を聞いて、舞台を鏡として楽しんでたと想像するのはさほど困難ではない。

その一方で、この芝居は作者自身述べているように「筋は退屈」で「誰でも考えつける」ものであり (Pearson 67)、イエイツの言を借りれば「物語にとって重要な位置を占め、悲劇的で感情的な人物達——アーバスノット夫人、ジェラルド、ヘスター——は舞台のコンベンションになっている」と特徴づけられる。(Morgan 33) こうしたプロットやキャラクターによって明らかにされる『つまらない女』という芝居は、しかし、ワイルドの作品の特質を考える際かなり根本的な問題を含んでいるようである。この小論ではその一面として、慣習の世界すなわち英国や英国社交界とは対極にある異質な登場人物たちに対するワイルドの共感、及び彼が英国に対して表明しようとしたアイロニカルな視点を探ってみたい。その視点の背景には、アイルランドで生まれた作者自身が英国に対して抱いた他者性がみられるのではないだろうか。

比較を明確にするために、まず同時代に人気のあった芝居に一般的にみられる幾つかの側面をこの作品に探し、次に異質なものについて考察することとする。

1 慣習の世界

『つまらない女』において中心的な役割を果たすのはアーバスノット夫人とイリングワース卿を巡るプロットである。夫人は若い頃イリングワース卿と恋に落ち、子供をもうけたものの、結婚を拒否されたため彼のもとを去ったというく過

去を持つ女である。しかもその過去とは未婚のまま出産するというスキャンダルであるが、子供の側からみればこれは父に捨てられたことを意味する。またイリングワース卿は地位と財力と知性に恵まれて機知に富む会話を愉しむ一方で世間からは邪悪だと評価される人物である。過去を持つ女、見捨てられた子供、邪悪な貴族はいずれも当時流行した芝居に多くみられる人物像であり、構成要素であった。(Powell 56, Bird 123) また、この2人が偶然再会し、息子ジェラルドをめぐる対立した挙げ句、彼とその恋人ヘスターに対しても夫人の過去が暴露される。言うまでもなく過去が露見するというプロットも当時人気がある芝居にしばしば見られる点であった。⁴¹⁾

このように、当時の舞台設定からみるとアーバスノット夫人は珍しい存在ではなかったが、英国社交界から距離をおいて描かれていることも事実だ。

2 異質な存在

では、この芝居において異質なものについて考えてみよう。ここで考えてみたい異質なものは2人の異質な存在、つまり登場人物である。その1人目は英国社交界から距離をおいて描かれている、という意味で異質な人物アーバスノット夫人であり、2人目は英国からみて異質な存在であるアメリカ人ヘスター・ワスリーである。

(1) アーバスノット夫人

最初に指摘したようにこの芝居においてアーバスノット夫人は〈過去を持つ女〉である。このタイプが社交界劇にしばしばみられる人物像であるのは確かだが、同時に社交界にとっては異質な存在である。アーバスノット夫人が社交界から孤立していることを示す場面、台詞はいくつか挙げることができる。

まず彼女がこの芝居に登場する仕方はやや通常と異なっている。その場面をみてみよう。上流階級の夫人達を招いてパーティを開いたハンスタントン卿夫人はアーバスノット夫人を 'My dear Mrs Arbuthnot! I am so pleased you have come up. But I didn't hear you announced.' (II. 303-4) という台詞で迎える。「呼ばれる」という動詞の現在形 announce とはパーティの際、階段のところに控えている執事が会場に向けて、招待客が到着した事を告げることである。⁴²⁾ 通常なされるべき announce という手続きがなぜ行われなかったのか。さらにイアン・スモールは、パーティ程の格式を持たない集まりでは客が召し使いに自分の名前を告げることになっていると述べて、それを知らないアーバスノット夫人の素朴さを指摘しているのだが、なぜテラスから入ってきたのかという疑問は残る。歓迎の言葉に対

してアーバスノット夫人は 'Oh, I came straight in from the terrace, Lady Hunstanton, just as I was. You didn't tell me you had a party.' (II. 305-6) と応える。つまり通常とは異なって玄関を通らなかったのが announce されなかったと言う事だが、なぜ玄関を通らなかったのかはやはり明らかにされていない。ハンスタントン卿夫人と個人的に面会する際は通常テラスから入ることにしており、この日もその慣習に従ったのかもしれない。であるとすればハンスタントン卿夫人と彼女の親しさを窺えもするが、反面パーティ開催を知らされなかったという事実も浮き彫りになる。ハンスタントン卿夫人はこの「パーティ」という表現を捉えて「パーティではありません。今滞在中のほんの2、3人のお客様だけですから。」と応え、彼女を同席している夫人達に紹介するのだが、自分の屋敷にテラスから入ることを許す程度に親しい相手に対して、ささやかとはいえ集まりを知らせなかったハンスタントン卿夫人はアーバスノット夫人に、明らかに距離を取っているとみてもよいであろう。或いは、彼女は個人的に夫人とある程度親しいのだが、それを社交界に属する人間には知られたくないのかもしれない。以上のやりとりから、ハンスタントン卿夫人はアーバスノット夫人に対して距離をおいていることが明らかになる。

また、ハンスタントン卿夫人はアーバスノット夫人について次のように述べる。 'She [Mrs Arbuthnot] is one of the good, sweet, simple people you [Hester] told us we never admitted into society.' (II. 333-4) この意見の前提として確認しておきたいのは、米国からやってきたヘスターは英国上流階級と彼等が作り上げた社交界に対して批判的な意見を持っている、ということである。例えばヘスターは英国上流階級の人々を 'You shut out from your society the gentle and the good. You laugh at the simple and the pure.'⁴³⁾ (II. 261-2) と述べており、彼女が gentle, good, simple, pure といった特性及びこれらを持った人々を大切だと考えていることが窺える。さきのハンスタントン卿夫人の台詞からは、ヘスターの批判的視線が皮肉をこめて容認されていることがわかる。同時にアーバスノット夫人の性格が分析されており、夫人のような人物は社交界から受け入れられないことも暗示されている。

アーバスノット夫人の異質性はもう一人の異質な人物、ヘスターによっても言及される。

HESTER. You [Mrs Arbuthnot] are so different from the other women here. When you came into the drawing-room this evening, somehow you brought with you a sense of what is good and pure in life. (III. 315-8)

先の引用からわかるように、ヘスターが重視しているのは *good, pure* といった特質であるが、アーバスノット夫人はそうした特性を持ち合わせている、と評価している。それと同時にアーバスノット夫人は他の女性達とはとても違っていると云う。夫人の社交界における異質な側面が表れている台詞であるが、これはヘスターが指摘しているように美德といえる点なのである。

アーバスノット夫人自身からみると、この異質さはどのように自覚されるのか。社交界から離れていることは自分が起こした過去の行為、つまり子供と共に夫となる人のもとを去った事が原因となっている。従って自分から社交界に対して距離をとっているのであり、このことについて十分に自覚的である。彼女は *'I live so much out of the world, and see so few people.'* (II. 355-6) と云う。さらに彼女は息子ジェラルドに向かって次のように言う。

MRS ARBUTHNOT. I am no different from other women except in the wrong done me and the wrong I did, and my very heavy punishments and great disgrace. (IV. 210-2)

これは自分がどのように他の女性達と違っているのかを峻別している点で自身の立場を認識していることを示す発言であるが、この台詞で特に注目したいのは *different* という単語だ。これは彼女が他の女性達と違っていることを認識していることを示す一方、その違いは *except* 以下で述べる点で異なっているにすぎない、と言っているようにも解釈できる。実際に *except* 以下で述べられていることは決して小さな問題ではないのだが、まず *no different* という発言があるため、彼女には他の女性達と違っている点を最小限の表現に留めておきたいという意向が窺える。また、*the wrong done me* は、彼女の選択が全面的に自身の判断で行われたということではない、という事を明らかにしている。言い換えれば彼女は半ば本意ながら、社交界から離れたところに身を置いていることを示しており、さらに彼女が他の女性達と違っているという事実は自分に全面的な責任を負わされるべきものではない、と考えているようにもとれる。つまりアーバスノット夫人は自身が過去に下した決断に対して、この時点においてなお内心のゆらぎを覚えているのだ。自己の位置付けに迷いを感じつつも、他方で彼女は苦い過去の経験と厳格な自己認識に基づいて、痛ましいまでに「人生に関して現実的な観点を持つ」(Kohl 220) に至るのである。ここにみられるのは現実を認識し、社交界から厳格

に距離を取りつつもその位置の意味に苦しむアーバスノット夫人の姿である。

(2) ヘスター

次に英国からみた場合の異質な存在ヘスター・ワースリーについてみてみよう。彼女はハンスタントン卿夫人の屋敷に客として招かれ、ジェラルドと親しくなり結婚を考えるようになる。その存在はその場に集まっている上流階級の夫人達によって登場早々に区別される。ヘスターが招待客の1人について *'I dislike Mrs Allonby.'* (I. 28) と云うと、会話の相手キャロライン夫人は次のように言う。

LADY CAROLINE. I am not sure, Miss Worsley, that foreigners like yourself should cultivate likes or dislikes about the people they are invited to meet. (I. 29-30)

キャロライン夫人は自分達と外国人を明確に区別し、ヘスターとの間に一線を画そうとしている。それは次の台詞にも表れている。ヘスターがジェラルドを賞賛すると彼女はこう言うのだ。

LADY CAROLINE. It is not customary in England, Miss Worsley, for a young lady to speak with such enthusiasm of any person of the opposite sex. (I. 49-50)

これはキャロライン夫人が自分達の控えめな態度に対するヘスターの積極性を違和感をもってみていると同時に牽制している表れであろう。ただし、ここでは同時にヘスターの率直なもの言い方にも注目したい。彼女は *'Mr Arbuthnot has a beautiful nature! He is so simple, so sincere.'* (I. 46-7) と述べてジェラルドを賞賛している。ヘスターの率直さ、正直さは明らかだが、それを英国人であるキャロライン夫人は認めようとしめない。つまり夫人はアメリカ人の率直さに対して異質だと感じており、それを英国人としては容認しない、ということになる。

またヘスターの価値観は前向きで、この点でジェラルドとの対照が示されるやりとりがある。イリングワース卿から秘書職を提案されて喜ぶジェラルドとヘスターの会話だ。

GERALD. ... things that were out of the reach of hope before may be within hope's reach now.

HESTER. Nothing should be out of the reach of hope. Life is a hope. (I. 81-4)

2人の持つ価値観は明確に違っており、ヘスターの持つ人生観ははっきりした図式によって描かれるものようである。

次にヘスターと夫人達のやりとりが緊迫する第2幕をみてみよう。ここでは冒頭から社交界に生きる女性達が理想の男性及び理想の夫について話し合っている。彼女達の会話は220行以上に渉って展開し、特にアロンビー夫人の機知に富む男性論や全体に流れる軽妙なトーンが注目されるが、話題はほとんど変わらない。ハンスタントン卿夫人に言わせれば *clever talk* である一連の会話を聞いていたヘスターは *'I couldn't believe that any women could really hold such views of life as I have heard tonight from some of your guests.'* (II. 230-1) と言う。つまりヘスターは女性達の会話内容をすべて否定するのだ。この後話題は変わるので彼女の男性観を知ることはできないが、ここに引用した一言で、ヘスターは他の女性達と全く異なる意見を持っている事がわかる。⁴⁹

ヘスターはさらに自分の意見を明らかにする。

HESTER. We are trying to build up life, ... on a better, truer, purer basis than life rests on here. ... You rich people in England, you don't know how you are living. ... With all your pomp and wealth and art you don't know how to live ... Oh, your English society seems to me shallow, selfish, foolish. ... It sits like a dead thing smeared with gold. (II. 257-73)

彼女の態度はあくまでも率直だ。この台詞で明らかにされるのはアメリカ人と英国人の生活と社会に対する姿勢の対照的な違いであり、賛美されるのはアメリカ人、批判されるのは英国人である。

他方でこの率直さは英国人からみるとどのように形容されるのか。スタッツフィールド夫人はヘスターのことを *'She is painfully natural, is she not?'* (II. 244) と言う。夫人にとってヘスターは *natural* であるが、それに *painfully* という副詞を付加する事で、いくらか哀れみを催させる存在だと認識している事を感じさせると共に、英国上流階級の自分達とは明らかに立場が違う、という冷ややかさを感じさせる表現だ。⁵⁰

さらに注目したいのは、ハンスタントン卿夫人がヘスターの意見に対して示す反応である。夫人達による *clever talk* を聞いていた、というヘスター。それに続

く夫人とヘスターのやりとりをみてみよう。

LADY HUNSTANTON. You mustn't believe everything that was said, you know, dear.

HESTER. I didn't believe any of it.

LADY HUNSTANTON. That is quite right, dear. (II. 226-8)

ハンスタントン卿夫人は自分達が話した内容を信じない、というヘスターの態度を肯定しているのである。これはどう解釈すればよいのだろうか。このやりとりの直前でハンスタントン卿夫人はヘスターが会話を聞いていたかも知れないとわかって *'I am afraid some of this clever talk may have shocked her a little.'* (II. 216-7) と危惧している。つまり、主に男性観を巡る彼女たちによる一連の会話がヘスターにはふさわしくない内容と判断された、ということであろう。それでも自分達の発言を全く信じない、と言われて「それで結構」で済ませられるだろうか。夫人は自分達の会話に責任を持たせていないと判断してもよいだろう。或いは *'Let us hope she didn't understand much.'* (II. 219) という台詞から、ハンスタントン卿夫人はヘスターを成熟し、十分な理解力をもった一個の人格としてみていないことが示唆される。であれば彼女が同じ部屋にいることを忘れて男性論を展開したのは軽卒ではないか。つまり、夫人達の会話は自ら否定を招くものとなっているのである。ヘスターの率直さとハンスタントン卿夫人の発言、社交界の女性達が交わす会話に見られる自己欺瞞ともとれる特質は対照的である。

この側面は他の場面においてもみられる。男女の違いについてアロンビー夫人は次のように言う。

MRS ALLONBY. We have a much better time than they have. There are far more things forbidden to us than are forbidden to them. (I. 149-51)

この台詞自体が逆説の効果を持っているが、対してスタッツフィールド夫人は *'Yes; that is quite, quite true. I had not thought of that.'* (I. 152) と応える。「そのとおり」と肯定しておきながら「考えた事がない」と言う。自分の発言に責任を持たせていない、不実を表わすものであると言えるだろう。

このようにみえてくると、ヘスターの異質性はある一定の構図を持っているよう

に解釈されるのではないだろうか。彼女はアメリカ人であり、英国人と異なっているのはその率直な発言、前向きな価値観という点だ。このような側面を果たして作者ワイルドはどのようにみているのか。

ワイルドは雑誌 *The Court and Society Review* の中で次のような意見を述べている。

... on the whole, the American invasion has done English society a great deal of good. American women are bright, clever, and wonderfully cosmopolitan. (66)

アメリカ文化の流入は英国社会に非常に良い影響を与えているという文章に続き、アメリカ女性に対して高い評価をしている。作者のこうした意見を背景にみると、彼はヘスターの姿勢をかなり賛美し、対して英国社会に生きる人々を冷ややかに見ていると考えてよいだろう。

このような2つの世界の間葛藤を表現している作家はワイルドだけではない。例えばワイルドとほぼ同時代に活躍したヘンリー・ジェームズは自身がアメリカ人でありながら英仏での暮らしを選択し、作品にもアメリカ世界とヨーロッパ世界の間で翻弄され破滅する人物像を描いた。『デイズ・ミラー』で天真爛漫さを見せるアメリカ人デイズはヨーロッパ社交界から閉め出され、受け入れられないまま病死する。『使者たち』でアメリカ人ストレーザは絢爛たるヨーロッパ文明と洗練されたかの地の人々に圧倒されて遂に自己を喪失してしまう。異なっているのは、ジェームズの場合描写した人物達はアメリカ対ヨーロッパの図式に取り込まれているのに対し、ワイルドは作品においては英国人に対するアメリカ人と英国社交界を描き、自身はアイルランドと英国の狭間に揺れ動いているという点であろう。この点については次章で再度触れられる。

3 ワイルドの視点

ここまで2種類の異質な存在についてみてきた。社交界からみた場合のアーバスノット夫人、英国からみた場合のヘスターというそれぞれの異質性は、作者のなかで連関しているといってよさそうだ。なぜならワイルドが賞賛しているアメリカ人女性の典型的な人物であるヘスターは、アーバスノット夫人を評価しているからである。

彼女たちを特徴づけているものは何か。それはこの芝居のキーワードとも言える程に頻繁に出て来る pure, good, simple に表れている。アーバスノット夫人、ヘ

スター共に純粋、善良、素朴を高く評価し、それらを持つ人々に賞賛の目を向ける。

また、purity という表現にも注意する必要がある。政治家ケルヴィルは purity を '... the one subject of really national importance, nowadays, ...' (I. 169) と言う。彼によれば、purity は国家全体で問題にしなければならないほどに失われつつあるということだ。さらに同じ台詞の最後で 'I find that the poorer classes of this country display a marked desire for a higher ethical standard.' (I. 171-2) と述べる。一連の台詞を繋いだものとしてみることで、ここで purity とは特に倫理基準に関連づけて「純潔」と解釈することが可能である。つまりケルヴィルの意見によれば、英国上流階級の人々は低所得階級の人々に比べて倫理基準が低いということになる。さらに彼の台詞には特定の個人の purity に言及したものもある。

KELVIL. Lord Illingworth is, of course, a very brilliant man, but he seems to me to be lacking in that fine faith in the nobility and purity of life which is so important in this century. (I. 322-4)

この台詞で purity は純粋さと解釈され得るが、ケルヴィルによれば知性に恵まれた英国貴族である一方、人生の高潔と純粋さを欠くイリングワース卿は非難されるべき対象なのである。

人物の人柄を表現する時に使われる pure, good, simple, purity といった言葉に表わされる特性は、本来国や階級を問わず存在するはずだ。それらを社交界から離れて生きる人物や、英国人からみた場合の外国人の中に描くワイルドの意図はどのあたりにあるのか。

彼が異質な人々を評価しているのは明らかである。それは次のやりとりからもわかる。終幕近くになり、アーバスノット夫人とジェラルド親子は混乱した状況を迎える。子供は母の過去が露見して父親だとわかったイリングワース卿についていく決心が揺らぎ、母を残して行く辛さに苦しみ、他方母は過去を息子に知られ、その恋人との結婚も危うくなったと思ひ苦しむ。こうした状況の中でアーバスノット夫人はジェラルドと自分のことについてヘスターに次のように言う。

MRS ARBUTHNOT. But we are disgraced. We rank among the outcasts....The sins of the parents should be visited on the children.... It is God's law. (IV. 311-3)

夫人はあくまでも謙虚で、自らに課せられた運命に従う純粋さが窺える態度をとるのだ。これに対してヘスターは 'God's law is only Love.' (IV. 314) と述べて神の愛に言及して彼等を励ます。この後親子の状況は好転し、ジェラルドとヘスターの婚約も進展して舞台には暖かい空気が流れる。いわばヘスターの一言が混乱した人物達の状況を落ち着かせるきっかけになっているのである。作者はヘスターに芝居の進行を促すだけでなく、観客に安心感を与える役割を担わせている点で、そしてアーバスノット夫人に謙虚な純粋さを体現させている点で、彼女たちの態度を評価していると言えるだろう。

前章で試みられた検証と作者による2名の人物に対する積極的な評価によって、ワイルドが英国及び英国社交界にとって異質な存在に対して共感の眼差しを持っていたことは明白である。

ただし、この共感には次の諸点を考慮すると、別の側面から見ることでもできるだろう。それはまず作者ワイルドの英国での位置である。彼は「英国を追い出され」「捕えられ裁かれ投獄され故国から追放され」(平井6) た敗残者であり、'the out-of-joint Victorian' (Schmidgall 6) である。ワイルドは英国から見捨てられた人間、と評されているのである。つまり彼自身がヴィクトリア朝英国にとって異質な存在だったといえる。この点ではさきにみたH・ジェームズが描いた人物像を思い起こすこともできる。一方でワイルドは生国アイルランドに対する英国をかなり冷静に捉えていた (Beckson 164-5) し、アイリッシュである自身の立場を重視もしており^⑥、アンビヴァレントな意識を持っていたことがわかる。英国における彼の位置を上述のように概観した場合、異質な人物達にはワイルドの彼等に対する共感と共に、英国とアイルランドの間で揺らぐ自分自身の心境が反映されているとも言えそうである。

次に注目したいのはアメリカが持つ若さという点から見える側面だ。ワイルドは雑誌 *The Court and Society Review* の中で「我々は子供から学ぶことができる」という考え(77)を表明している。^⑦ また、イリングワース卿の言葉を借りればアメリカ人は「幼児期の第一段階にある」('To hear them talk one would imagine they were in their first childhood.' I. 235-6)。これら2点をまとめれば、子供であるアメリカ人が大人を教え導く、という解釈もできるだろう。その〈大人〉を英国と断言する事はできないが、ワイルドの指摘によればアメリカが「英国社会に多大な善をほどこしている」のは先にみたとおりである。このようにみると、彼は英国を教え諭す役割としてアメリカを捉えていたとも言えるのではないだろうか。

では英国や英国社交界に対して、ワイルドは異質な存在という形象を通して何

を暴こうとしているのか。社交界の人々が持つアイロニー、冷やかかさ、自己欺瞞、英国人は生き方を知らないという指摘は今までにみてきた場面や台詞から明らかである。これらによって当時の英国人観客はこの芝居に描かれている社交界の人々に自らの似姿を見て笑い飛ばすことはあったかもしれないものの、安心感を覚えたり、心から賛同したりする事は少なかつただろう。言い換えればこの芝居は英国人や社交界の人々に対して向けられた異化作用を持っていたと言えるのではないだろうか。つまり観客は芝居の登場人物達に同情したり過剰に反感を持つことなく、敢えて芝居から距離を保つよう導かれるのである。自分達の反映のような登場人物達からの意図的な乖離は、見ている者達に苦々しい思いを引き起こしたのではないか。しかもこの行為が〈幼児〉アメリカ人に教え導かれ、社交界と無関係ではないものの距離をとろうとする女性によって具象化される時、異化作用は痛烈に当時の観客に働きかけただろう。これは英国社交界に浸りつつアイリッシュである自己のアンビヴァレントな位置を意識し続けた作者が提示しようとした、英国演劇に対する新たな視点だったのではないだろうか。

*本稿は2006年11月25日に開催された日本ワイルド協会第31回大会における口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。

使用テキスト

Wilde, Oscar. *A Woman of No Importance*. Ed. Ian Small. London: A & C Black, 1993.
Wilde, Oscar. *A Selected Journalism*. Ed. Anya Clayworth. Oxford: Oxford U.P., 2004.

引用文献

Beckson, Karl. *The Oscar Wilde Encyclopedia*. New York: AMS Press, 1998.
Bird, Alan. *The Plays of Oscar Wilde*. New York: Barnes & Noble, 1977.
Kohl, Norbert. *Oscar Wilde: The Works of a Conformist Rebel*. European Studies in English Literature Trans. David Henry Wilson. Cambridge: Cambridge University Press 1989.
Morgan, Margery, comp. *File on Oscar Wilde*. Reading: Methuen Drama, 1990.
Pearson, Hesketh. *Bierbohm Tree: His Life and Laughter*. London: Methuen & Co. Ltd, 1956.
Powell, Kerry. *Oscar Wilde and the Theatre of the 1890s*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
Schmidgall, Gary. *The Stranger Wilde: Interpreting Oscar*. London: Dutton, 1994.
平井博 『オスカー・ワイルドの生涯』松柏社、1960年。

注

- 1 Powell 第2章 Lady Windermere's Fan and the unmotherly mother を参照。
- 2 Wilde, Oscar. *A Woman of No Importance*. Ed. Ian Small. London : A & C Black, 1993. p.46.
- 3 ヘスターの台詞に頻出する 'pure' であるが、これは「純粋な」「素朴な」と解釈される。なお、後にケルヴィルの台詞の2箇所に出てくる 'purity' が扱われるが、各々「純潔」、「純粋さ」という意味で用いていると解釈される。
- 4 ヘスターは 'views of life' という表現を使っているが、この直前まで女性達によって交わされていた会話は具体的には男性論であるので、男性観と解釈する。
- 5 この台詞の直前でハンスタントン夫人は 'I am afraid in England we have too many artificial social barriers.' (II. 238-9) と述べる。この台詞には natural との対照を見せる artificial という表現がある点で興味を引く。夫人は反語的に使っているが、artificial social barriers は自分達を保護する装置、という解釈が可能であるので、artificial には肯定的かつ歓迎すべきもの、という含意を読み取ることもできるだろう。アメリカ人と英国社交界の人々の相違は natural と artificial にもこめられているといえる。
- 6 Coakley, Davis. *Oscar Wilde —The Importance of Being Irish*. Dublin : Town House, 1994. Pine, Richard. *The Thief of Reason —Oscar Wilde & Modern Ireland*. New York : St Martin's Press, 1995. を参照。
- 7 この指摘については Schmidgall、145-6 ページにおいても言及されている。